

病害虫発生予察情報（8月予報）

平成 28 年 7 月 27 日
静岡県病害虫防除所長

1 予報概況

作物名	病害虫名	予報 (8月の県平均平年値)	予報の根拠
イネ	葉いもち・穂いもち	発生量：多 (葉いもち発病株率 1.3%) (穂いもち発病株率 0.6%)	7月上中旬の葉いもち発生量： 多(+) 気象予報：気温：並～低い(+) 降水量：並～多い(+)
	紋枯病	発生量：やや多 (発病株率 6.3%)	7月上中旬発生量：多(+) 気象予報：気温：並～低い(-) 降水量：並～多い(+)
	もみ枯細菌病	発生量：やや少 (発病株率 0.5%)	7月上中旬発生量： 少(発生なし)(-) 気象予報：気温：並～低い(-) 降水量：並～多い(+)
	ごま葉枯病	発生量：やや少 (発病株率 10.1%)	7月上中旬発生量： 少(発生なし)(-) 気象予報：気温：並～低い(-) 降水量：並～多い(+)
	斑点米カメムシ類	発生量：やや少	7月上中旬発生量：並(±) 気象予報：気温：並～低い(-) 降水量：並～多い(-)
	コブノメイガ	発生量：少 (被害株率 2.8%)	7月上中旬発生量：少(-) 気象予報：気温：並～低い(-) 降水量：並～多い(-)
	イチモンジセセリ	発生量：やや多 (25株あたり寄生数 0.5頭)	7月上中旬発生量：多(+) 気象予報：気温：並～低い(-) 降水量：並～多い(-)
サツマイモ	ナカジロシタバ	発生量：多 (寄生虫数 0.5頭/m ²)	7月中旬発生量：多(+) 気象予報：気温：並～低い(±) 降水量：並～多い(±)
	イモキバガ (イモコガ)	発生量：少 (巻葉数 21.0葉/m ²)	7月中旬発生量：少(-) 気象予報：気温：並～低い(±) 降水量：並～多い(-)
	エビガラスズメ	発生量：並 (寄生虫数 0.03頭/m ²)	7月中旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：並～低い(±) 降水量：並～多い(±)
チャ	炭疽病	発生量：多 (病葉数 22.9葉/1.25m ²)	7月中下旬発生量：多(±) 気象予報：気温：並～低い(+) 降水量：並～多い(+)
	輪斑病	発生量：少 但し、平坦地ではやや少 (病葉数 2.1葉/1.25m ²)	7月中下旬発生量：少(-) 気象予報：気温：並～低い (±：平坦地では+)

作物名	病害虫名	予報 (8月の県平均平年値)	予報の根拠
チャ	新梢枯死症	発生量：並 但し、平坦地ではやや多 (発症枝数 7.2 枝/1.25m ²)	7月中下旬発生量：2.0 枝/1.25m ² (平年値なし) 気象予報：気温：並～低い (±：平坦地では+)
	チャハマキ	発生量：少 (寄生虫数 2.2 頭/1.25m ²) 発生時期：早い	7月中下旬発生量：少(－) 気象予報：気温：並～低い(±) 降水量：並～多い(±)
	チャノコカクモン ハマキ	発生量：少 (寄生虫数 2.0 頭/1.25m ²) 発生時期：早い	7月中下旬発生量：少(－) 気象予報：気温：並～低い(±) 降水量：並～多い(±)
	チャノホソガ	発生量：少 (巻葉数 5.4 葉/1.25 m ²)	7月中下旬発生量：少(－) 気象予報：気温：並～低い(±) 降水量：並～多い(－)
	チャノキイロ アザミウマ	発生量：並 (叩き落とし虫数 19.6 頭/4 カ 所)	7月中下旬発生量：多(+) 気象予報：気温：並～低い(－) 降水量：並～多い(－)
	チャノミドリヒメ ヨコバイ	発生量：やや少 (叩き落とし虫数 1.6 頭/4 カ 所)	7月中下旬発生量：並(±) 気象予報：気温：並～低い(－) 降水量：並～多い(－)
	ヨモギエダシャク	発生量：並 (叩き落とし虫数 0.1 頭/4 カ 所)	7月中下旬発生量：並(±) 気象予報：気温：並～低い(±) 降水量：並～多い(±)
ウンシュウ ミカン	黒点病	発生量：やや少 (発病度 1.0)	7月中旬発生量：少(－) 気象予報：気温：並～低い(±) 降水量：並～多い(+)
	ミカンハダニ	発生量：少 (寄生葉率10.7%)	7月中旬発生量：少(－) 気象予報：気温：並～低い(+) 降水量：並～多い(－)
	チャノキイロ アザミウマ	発生量：やや小 (寄生果率 0.3%)	7月中旬発生量：並(±) 気象予報：気温：並～低い(－) 降水量：並～多い(－)
中晩柑類	かいよう病	発生量：やや少 (発病度(果) 0.4)	7月中旬発生量：少(－) 気象予報：気温：並～低い(±) 降水量：並～多い(+)
ナシ	ハダニ類	発生量：並	7月中旬発生量：並(±) 気象予報：気温：並～低い(+) 降水量：並～多い(－)
	ナシヒメシンクイ	発生量：並	7月中旬発生量：並(±)(発生なし) フェロモン誘殺数：少(－) 気象予報：気温：並～低い(－) 降水量：並～多い(±)
カキ	フジコナ カイガラムシ	発生量：少 (寄生果率2.1%)	7月中旬発生量：少(－) 気象予報：気温：並～低い(－) 降水量：並～多い(－)
	ハマキムシ類	発生量：少	7月中旬発生量：少(－) 気象予報：気温：並～低い(±) 降水量：並～多い(±)

作物名	病害虫名	予報 (8月の県平均平年値)	予報の根拠
果樹全般	カメムシ類	発生量：やや少	7月中下旬誘殺数：少(－) ヒノキ毬果吸汁痕数：少(－) 気象予報：気温：並～低い(±) 降水量：並～多い(±)
キク (露地)	白さび病	発生量：やや少 (発病株率0.1%)	7月上旬発生量：少(発生なし) (－) 気象予報：気温：並～低い(±) 降水量：並～多い(+)
	黒斑・褐斑病	発生量：やや少 (発病株率3.5%)	7月上旬発生量：少(－) 気象予報：気温：並～低い(+) 降水量：並～多い(+)
	えそ病 (トマト黄化えそウイルス：TSWV)	発生量：少 (発病株率0.2%)	7月上旬発生量 えそ病：少(発生なし)(－) アザミウマ類：並(±) 気象予報：気温：並～低い(－) 降水量：並～多い(－)
	アザミウマ類	発生量：やや少 (被害株率6.5%)	7月上旬発生量：並(±) 気象予報：気温：並～低い(－) 降水量：並～多い(－)
	オオタバコガ	発生量：やや多 (被害株率8.7%)	7月上旬被害：多(+) 7月の成虫誘殺数：並～多い(+) 気象予報：気温：並～低い(－) 降水量：並～多い(－)
野菜全般	ハスモンヨトウ	発生量：やや多	7月の成虫誘殺数：並～多(+) 気象予報：気温：並～低い(－) 降水量：並～多い(±)

表の見方について

- ・ 予報の発生量は平年(静岡県の過去10年間)との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階で示しています。
- ・ 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年(静岡県の過去10年間)との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階で示しています。
- ・ 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況(調査時期と発生量)、気象庁の1ヶ月予報(気温と降水量)を記入しています。その状況が多発要因の場合は(+)、少発要因の場合は(－)を示し、+-を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

2 予報の根拠と防除対策

【イネ】

<生育の概況等>

巡回時の生育調査（下表、調査期間：7月7日～12日）の結果、草丈は平年よりやや低く、茎数は平年よりやや多く、葉色は平年並であった。病害虫防除員からのアンケート調査によれば、生育は平年よりも早い傾向にある。

7月上中旬のイネ生育調査結果

	田方 平坦地	東部 高冷地	志太榛原	中遠・西部 (普通期)	中遠 (早期)	県平均
草丈 (cm)	47.3 (58.3)	61.6 (71.7)	58.0 (67.1)	48.7 (70.1)	73.0 (87.1)	57.7 (71.0)
茎数 (本)	26.5 (24.3)	29.0 (21.5)	29.6 (23.2)	23.9 (22.8)	28.6 (22.5)	27.5 (22.9)
葉色 (指数1-7)	5.0 (4.6)	4.5 (4.4)	4.2 (4.3)	4.3 (4.4)	4.2 (4.4)	4.4 (4.4)

()内は平年

●葉いもち・穂いもち

予報の根拠

- ・7月上中旬の巡回調査では、葉いもちの県平均発病株率は6.5%（平年2.0%）と平年より多かった。
- ・1ヶ月予報では、8月の気温は平年並～低く、降水量は平年並～多いため、本病の発生を助長する（感染好適条件：気温15℃～25℃、葉面湿潤時間10時間以上、前5日間の平均気温が20℃～25℃を全て満たす時。）。

防除対策

- ・育苗箱処理剤の残効は出穂期頃までなので、効果の切れた時期以降で、本病の発生に適した雲雨天で日照不足が続く場合は注意が必要である。
- ・上位1～3葉に病斑が見られる場合は、適期（穂ばらみ期～穂ぞろい期）に必ず防除を実施する。特に、急性型病斑（病斑周辺部に褐色部分が少なく、病斑が暗緑色あるいはねずみ色）が多いときには、速やかに薬剤散布をする。
- ・常発地では薬剤の予防散布を行う。
- ・本県ではMBI-D剤（「ウィン」、「デラウス」または「アチーブ」を含む剤）耐性いもち病菌が発生している。また、近年、他県ではQoI剤（「アミスター」または「嵐」を含む剤）耐性いもち病菌が発生し問題となっており、本県でも発生が懸念されるため、耐性菌の発生リスクが高い薬剤を使用する場合は、連用を避けるなど適切に使用する（詳細は県病害虫防除基準の「殺菌剤耐性菌に関する各種資料について」の項を参照）。

7月のイネいもち病の発病株率（％）

	田方 平坦地	東部 高冷地	志太榛原	中遠・西部 (普通期)	中遠 (早期)	県平均
本年	0.8	0.0	5.2	8.8	17.6	6.5
平年	0.2	0.7	0.7	4.9	3.7	2.0

●紋枯病

予報の根拠

- ・7月上中旬の巡回調査では、県平均発病株率は1.9%（平年0.7%）と平年より多かった。
- ・1ヶ月予報では、8月の降水量は平年並～多いが、気温は平年並～低いため、本病の発生をあまり助長しない（本病原菌は生育適温28～32℃と高温を好む）。

防除対策

- ・水田等で越冬した菌核が一次伝染源となるため、前年発生がみられたほ場では発生しやすい。そのようなほ場では発生に注意し、発生が見られた場合はすみやかに薬剤防除を行う。
- ・病斑が上位葉鞘まで上がると減収の要因になる。特に過繁茂となっているほ場では多発しやすいため、そのようなほ場では今後の発生に注意する。

●もみ枯細菌病

予報の根拠

- ・7月上中旬の巡回調査では、発病は認められなかった（平年発病株率0.04%）。
- ・1ヶ月予報では、8月の降水量は平年並～多いが、気温は平年並～低いため、本病の発生をあまり助長しない（本病原菌は生育適温30～35℃と高温を好む）。

防除対策

- ・本病は、発病後の薬剤による防除効果が期待できないため、常発地や本年育苗期に発生がみられた場合は必ず防除適期（出穂期前後）に予防散布を行う。
- ・出穂期が台風等の風雨と重なった場合には多発する恐れがあるため、風雨直後に薬剤散布する。

●ごま葉枯病

予報の根拠

- ・7月上中旬の巡回調査では、発病は認められなかった（平年発病株率2.4%）。
- ・出穂期以降登熟期までの高温は、イネの老化と病原菌の活動を促すため、本病の発生が多くなる（病原菌の生育適温：25～30℃）。1ヶ月予報では、8月の降水量は平年並～多いが、気温は平年並～低いため、本病の発生をあまり助長しない。

防除対策

- ・肥料切れにより発生が助長されるため、穂肥を適切に施用する。
- ・出穂期以降に高温・多湿が続いた場合には、葉の斑点のみならず穂枯れを起こすので、葉に病斑が見られる場合は穂ばらみ期～穂ぞろい期にかけて薬剤散布を行う。

●斑点米カメムシ類（アカスジカスミカメ、アカヒゲホソミドリカスミカメ等）

予報の根拠

- ・ 7月上中旬の水田周辺における雑草のすくい取り調査では、県平均捕獲数は19.6頭/30回振り（平成18.3頭/30回振り）と平成並の発生であり、全調査地点中81%（平成72%）の調査地点から斑点米カメムシ類が捕獲された。中遠・西部地域の捕獲数は平成より多く、東部高冷地および志太榛原地域の捕獲数は平成より少なかった（下表）。
- ・ 周辺雑草から捕獲したカメムシ類のうち、アカスジカスミカメが全捕獲数の84%、アカヒゲホソミドリカスミカメが同15%を占めた。その他、ホソハリカメムシ、シラホシカメムシ、トゲシラホシカメムシなどが捕獲された。
- ・ 7月第3半旬時点の県内4ヶ所の予察灯では、アカスジカスミカメとアカヒゲホソミドリカスミカメの誘殺数は平成並～多く推移している。
- ・ 1か月予報では、8月の気温は平成並～低く、降水量は平成並～多いため、本虫の増殖・移動分散を特には助長しない。

防除対策

- ・ 斑点米カメムシ類はイネ科やカヤツリグサ科雑草の種子で増殖するため、水田周囲の雑草を除草する。ただし、水稻の出穂間際の除草はカメムシ類の本田侵入を助長する可能性があるため、出穂10日前までに除草を終了する。
- ・ 出穂後は水田内のカメムシ類の発生に注意し、確認された場合は薬剤防除を実施する。特に出穂期が周辺より早い水田はカメムシ類が集中するため、注意を要する。
- ・ 穂揃期（成虫侵入期）とその7～10日後（幼虫ふ化期）の2回薬剤散布を行うと効果が高い。
- ・ 粒剤は出穂期に散布する。
- ・ 農林水産省の蜜蜂被害事例調査により、「蜜蜂被害は、水稻のカメムシを防除する時期に多く、水稻のカメムシ防除に使用した殺虫剤（農薬）を直接浴びたことが原因である可能性が高い」ことが報告されたため、養蜂家との情報を図る等、蜜蜂への影響に留意し防除を行う。なお、詳細は農林水産省ホームページ（http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_mitubati/honeybee_survey.html）を参照すること。

7月の畦畔・雑草地における斑点米カメムシ類の捕獲頭数（頭/30回振）

	田方平坦地	東部高冷地	志太榛原	中遠・西部 普通期	中遠 早期	県平均
本年度	7.3	0.3	10.5	52.3	27.7	19.6
平成	7.8	2.2	24.6	27.5	29.6	18.3

●コブノメイガ

- ・ 7月上中旬の巡回調査では平均被害株率0.1%（平成1.2%）と、平成より少なかった。
- ・ 1か月予報では、8月の気温は平成並～低く、降水量は平成並～多いため、本種の増殖を特には助長しない。

- ・普通期栽培では出穂前に加害されると登熟歩合が低下するので、8月上～中旬に成幼虫の発生を確認する。上位葉を幼虫が食害している場合は直ちに薬剤を散布する。成虫が確認された場合は5～7日後に薬剤を散布する。

●イチモンジセセリ

- ・7月上中旬の巡回調査では平均寄生数は0.12頭/25株（平年0.05頭/25株）と、平年より多かった。
- ・普通期栽培で葉色の濃い水田では被害が集中するので、葉巻の発生に注意し、葉巻内に幼虫が見られる場合は薬剤防除を行う。

<その他の病害虫>

●トビイロウンカ

- ・7月上中旬の巡回調査では発生は確認されなかった（平年発生なし）。
- ・7月第3半旬時点の県内4ヶ所の予察灯では、トビイロウンカの誘殺は確認されていない。
- ・例年、8月以降に発生量が増加する。8～9月に高温が継続する場合は急増し、9月以降に坪枯れを起こすことがあるため、注意が必要である。
- ・葉色に注意し、水田内の一部が坪状に黄化している場合は株元を観察し、成幼虫の寄生が確認された場合は直ちに薬剤防除を行う。

【サツマイモ】

<生育の概況等>

生育は平年並。

●ナカジロシタバ

予報の根拠

- ・7月中旬に行った巡回調査では、平均寄生幼虫数は0.7頭/m²（平年0.2頭/m²）で平年より多かった。
- ・例年8月に幼虫が増加する。
- ・1ヶ月予報では、8月の気温は平年並～低く、降水量は平年並～多いが、生息密度に及ぼす影響は少ない。

防除対策

- ・幼虫は齢期が進むと葉を食い尽くすので、例年発生するほ場では注意が必要である。
- ・幼虫が多数見られるようであれば直ちに薬剤防除を行う。

●イモキバガ（イモコガ）

予報の根拠

- ・7月中旬に行った巡回調査では、平均巻葉数は1.3葉/m²（平年2.7葉/m²）と平年に比べ少なかった。
- ・1ヶ月予報では、8月の気温は平年並～低く、降水量は平年並～多いため、本種の発生を抑制する。

防除対策

- ・例年、8月は葉の繁茂に伴い巻葉数が増加する。多発生のは場では、被害が拡大する前に防除を行う。

●エビガラスズメ

予報の根拠

- ・7月中旬に行った巡回調査では、発生を認めなかった（平年0.04頭/m²）。
- ・防除を実施しているほ場は発生が少ない。

防除対策

- ・中～老齢幼虫は1頭当たりの食害量が多いため、若齢幼虫のうちに防除を行う。

【チャ】

<生育の概況等>

7月中下旬の巡回調査時では、二番茶の摘採後に葉をわずかに残す程度に浅刈りを行った茶園が多く、その後の芽の生育も茶園によりばらつきがみられた。また、更新園も多く見られた。

●炭疽病

予報の根拠

- ・7月中下旬の巡回調査では、二番茶摘採残葉や遅れ芽で平均36.0葉/1.25m²（平年10.7葉/1.25m²）の発生が見られ、平年より多かった。多発している茶園が県内各地で散見された。
- ・本病の感染には新芽生育時に10時間以上の濡れが必要である。1ヶ月予報では気温は平年並～低く、降水量は平年並～多いため、本病の発生を助長する（分生子の発芽適温22～27℃）。

防除対策

- ・新芽開葉期に半日以上続く降雨があった場合は、早めに防除を行う。なお、萌芽期～一葉開葉期には予防剤（ダコニール1000、フロンサイドSCなど）を使用する。

●輪斑病

予報の根拠

- ・7月中下旬の巡回調査では、二番茶摘採残葉で平均11.5葉/1.25m²（平年18.1葉/1.25m²）の発生が見られ、平年より少なかった。
- ・本病の発病は25℃以上の高い気温が好適である。1ヶ月予報では気温は平年並～低いが、平坦地では8月の平均気温が25℃を超えるため、平坦地では特に助長する。

防除対策

- ・摘採や整枝によってできた傷口が発病に必要なため、常発園では、整枝等の作業を行った際には、翌日までに薬剤による防除を行う。

●新梢枯死症

予報の根拠

- ・7月中下旬の巡回調査では、平均2.0枝/1.25m²の発生が認められた（7月の平年値なし）。また、茎枯れ症状も多数認められている。しかし、本症状の原因として輪斑病菌が関与しているものは半数程度であることが判明しており、残りは多雨による水腐れや高温等による生理的な要因と考えられる。
- ・1ヶ月予報では気温は平年並～低いが、平坦地では8月の平均気温が25℃を超えるため、平坦地では特に助長する。

●新梢枯死症

防除対策

- ・高温等の生理的な要因による発生を予防するため、少雨が続く場合にはかん水による干ばつ害の予防を励行する。
- ・三番茶を摘採しない園では、三番茶芽の萌芽期から生育期に、三番茶を摘採する園では、秋芽の萌芽期から生育期に、2回程度薬剤を散布する。なお、QoI 剤（商品名：アミスター20フロアブル、ストロビーフロアブル、フリントフロアブル 25、ファンタジスタ顆粒水和剤）は、耐性菌が発生しやすいので同一薬剤として扱い、連用を避ける。

●チャハマキ、チャノコカクモンハマキ

予報の根拠

- ・7月中下旬の巡回調査では、平均寄生虫数はチャハマキが0.5頭/1.25㎡（平年3.2頭）、チャノコカクモンハマキが0.2頭/1.25㎡（平年2.2頭）で、両種ともに平年に比べ少発生であった。
- ・1ヶ月予報では、8月の気温は平年並～低く、降水量は平年並～多いが、この時期に生息密度に及ぼす影響は少ない。
- ・例年、本種の平年の第2世代成虫発生盛期は8月上旬から中旬で、第3世代幼虫を対象とした防除時期は8月中旬から下旬になるが、本年は越冬世代、第1世代の発生が早く、第2、3世代幼虫の発生時期は早まることが予想される。

防除対策

- ・地域の予察灯やフェロモントラップでの成虫の誘殺状況に注意して適期防除を行う。なお成虫の誘殺数データは防除所ホームページで提供している。

●チャノホソガ

予報の根拠

- ・7月中下旬の巡回調査では、平均巻葉数は0.3葉/1.25㎡（平年1.7葉）で、平年に比べ少発生であった。
- ・1ヶ月予報では、8月の気温は平年並～低く、降水量は平年並～多いため、本種の発生をやや抑制する。

防除対策

- ・新芽生育期と成虫発生期が合致すると発生が多くなる。
- ・二番茶後に浅刈りした茶園が多く、そのような茶園では新芽の生育時期が例年とは異なる。そのため、地域の予察灯やフェロモントラップにおける誘殺虫数の推移に注意し、成虫の発生盛期と新芽の生育時期が合致する場合は、新芽への産卵状況に注意し、適期防除に努める。なお成虫の誘殺数データは防除所ホームページで提供している。

●チャノキイロアザミウマ

予報の根拠

- ・7月中下旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は18.1頭/4カ所（平年12.3頭）と平年に比べ多かった。
- ・1ヶ月予報では、8月の気温は平年並～低く、降水量は平年並～多いため、本種の発生を抑制する。

●チャノキイロアザミウマ

防除対策

- ・例年、8月の新芽生育期は発生が増加するので、新芽の萌芽から開葉期に防除を実施する。また、二番茶摘採後に浅刈りした茶園では、新芽の生育時期が通常茶園とは異なるので、新芽の生育状況に注意し、新芽萌芽から生育期に防除を実施する。

●チャノミドリヒメヨコバイ

予報の根拠

- ・7月中下旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は2.4頭/4カ所（平年2.3頭）と平年並であった。
- ・1ヶ月予報では、8月の気温は平年並～低く、降水量は平年並～多いため、本種の発生を抑制する。

防除対策

- ・例年、8月の新芽生育期は発生が増加するので、新芽の開葉期に防除を実施する。また、二番茶摘採後に浅刈りした茶園では、新芽の生育時期が通常茶園とは異なるので、新芽の生育状況に注意し、新芽開葉期に防除を実施する。

●ヨモギエダシャク

予報の根拠

- ・7月中下旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は0.12頭/4カ所（平年0.09頭）と平年並みに少なかった。
- ・1ヶ月予報では、8月の気温は平年並～低く、降水量は平年並～多いが、生息密度に及ぼす影響は少ない。

防除対策

- ・平年では、8月後半になると予察灯への成虫誘殺数が増加する。茶園内をよく観察し、薬剤感受性の高い若齢幼虫の時期に防除を行う。

<その他の病害虫>

●チャノホコリダニ

- ・8月に降雨が少なく乾燥が続くと、8月中旬から9月にかけて秋芽に発生するが、1ヶ月予報では、降水量は平年並～多いため、本種の発生は特に助長されない。
- ・秋芽をよく観察し、発生を確認したら早めに防除を行う。

●チャトゲコナジラミ

- ・7月中下旬の巡回調査では、成虫が発生している茶園が各地で見られた。
- ・本年は成虫の発生が例年より早まっており、7月末には新たな幼虫の発生が見られるようになる。
- ・7月に成虫の発生が目立った茶園では、7月末から8月初旬の若齢幼虫の時期に防除を行う。
- ・幼虫は裾部の葉裏に多く生息するので、防除の前に裾刈りを行い、幼虫の寄生している葉を枯らす（幼虫は移動できないため、寄生した葉が枯れると死亡する）。その後に薬剤散布を行うと、薬液が茶株の内側まで十分に付着し防除効果が高まる。

【ウンシュウミカン】

<生育の概況等>

主要産地における生育は平年より5～7日程度早い。

●黒点病

予報の根拠

- ・7月中旬の巡回調査では、果実の平均発病度は0.01と平年より少なかった（平年発病度0.2）。
- ・本病は風雨によって伝染するため多雨は発生を助長する。1ヶ月予報では気温は平年並～低く、降水量は平年並～多いため本病の発生を助長する。

防除対策

- ・薬剤散布は前回の散布日から25～30日または累積降雨量が250～300mmを目安にして防除を行う。
- ・アメダスの気象データを用いたシミュレーションによれば、気象が今後平年並みに推移した場合、7月上旬に防除を行った園では8月下旬、7月中旬に防除を行った園では8月下旬～9月上旬が要防除時期となる（防除所ホームページを参照）。

●ミカンハダニ

予報の根拠

- ・7月中旬の巡回調査における平均寄生葉率は7.2%（平年17.7%）で、平年より少ない発生だった。
- ・1ヶ月予報によると、気温は平年並～低く、降水量は平年並～多いため、本虫の発生を特に助長しない。

防除対策

- ・夏期（7～8月）は天敵（カブリダニ類、ハネカクシ類、テントウムシ類）の発生が多くなるが、ミカンハダニが多発している園（葉あたり3頭を超える園地）では薬剤防除を行う。

●チャノキイロアザミウマ

予報の根拠

- ・7月中旬の巡回調査では、本虫の平均寄生果率は0.0%（平年寄生果率0.3%）と平年並であった。果梗部の平均被害度は1.6（平年0.6）と平年より多く、果頂部の被害度は0.02（平年0.1）と平年より少なかった。
- ・1ヶ月予報によると、気温は平年並～低く、降水量は平年並～多いため、本虫の発生を助長しない。

防除対策

- ・アメダスの気象データを用いた予測では、今後気温が平年並みに推移した場合、第5世代成虫の発生ピークは8月第1～3半旬、第6世代成虫の発生ピークは8月第3～6半旬と予想される（各地域における成虫発生時期の予想については防除所ホームページを参照）。
- ・薬剤防除適期は各世代の飛来ピーク7日前～当日までである。各地域の発生ピークを参考に防除を行う。
- ・樹冠占有面積率60%以下の園地で、反射率90%以上の光反射シートマルチを全面被覆すれば、薬剤防除と同等の効果がある。

【中晩柑】

●かいよう病

予報の根拠

- ・ 7月中旬の巡回調査では、葉の発病度は0.2（平年葉発病度0.6）、果実の発病度は0.03（平年果実発病度0.3）と平年より少なかった。
- ・ 1ヶ月予報では、気温は平年並～低く降水量は平年並～多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・ 本病に対する薬剤散布は、予防散布に重点を置く。発生が見られる園地では感染の拡大を防ぐため降雨前の薬剤散布を行う。
- ・ 台風が襲来すると感染を著しく助長し、それ以前の発生量が少ない場合でも多発する恐れがある。降雨後に散布しても、すでに感染した組織内の菌にはほとんど効果はないので、気象情報とほ場の発生状況に注意して降雨前の予防散布を行う。

【ナシ】

<生育の概況等>

主要産地における生育は平年並～4日程度早い。

●ハダニ類

予報の根拠

- ・ 7月中旬の巡回調査では平均寄生葉率は1.9%（平年2.0%）で平年並の発生だった。
- ・ 1ヶ月予報によると、気温は平年並～低く、降水量は平年並～多いため、本虫の発生を特に助長しない。

防除対策

- ・ 発生園では収穫前日数に注意して防除を行う。
- ・ 葉当たり雌成虫密度1～2頭（寄生葉率20～40%）が防除の目安である。この時期は増殖が速いので園内の発生状況をよく観察する。

●ナシヒメシクイ

予報の根拠

- ・ 7月中旬の巡回調査では被害果の発生は見られなかった（平年被害果率0.0%）。
- ・ 浜松市のフェロモントラップの誘殺数は平年に比べて少なく推移している。
- ・ 1ヶ月予報によると、気温は平年並～低く、降水量は平年並～多いため、本虫の発生を助長しない。

防除対策

- ・ 成虫の発生は8月上旬～中旬にかけて多くなると予想されるので、無袋栽培園では収穫時期に注意し、防除を行う（誘殺データは防除所ホームページを参照）。

【カキ】

＜生育の概況等＞

主要産地における生育は平年より3日程度早い。

●フジコナカイガラムシ

予報の根拠

- ・7月中旬の巡回調査では平均寄生果率は0.3%（平年1.0%）で平年より少ない発生だった。
- ・1ヶ月予報によると、気温は平年並～低く、降水量は平年並～多いため、本虫の発生を助長しない。

防除対策

- ・近年、発生が増加傾向にあることから、発生がみられるほ場では7月下旬から8月上旬のふ化～2齢幼虫発生時期に防除する。本種は果実とヘタの間の薬剤が届きにくい所に寄生しているので散布を丁寧に行う。

●ハマキムシ類（チャハマキ、チャノコカクモンハマキ）

予報の根拠

- ・7月中旬の巡回調査では、平均被害葉率は0.9%で（平年被害葉率1.3%）で平年より少ない発生であった。
- ・1ヶ月予報によると、気温は平年並～低く、降水量は平年並～多いため、本虫の発生を助長しない。

防除対策

- ・両種の第2世代成虫発生時期は8月上旬～中旬まで、発生時期が長くなることが多い。地域の予察灯やフェロモントラップでの成虫の誘殺状況に注意し適期に防除する。（誘殺データは防除所ホームページを参照）

【果樹全般】

●カメムシ類（チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシ）

予報の根拠

- ・7月第1～4半旬までのフェロモントラップでは、チャバネアオカメムシの平均合計誘殺数は541.4頭／箇所（平年617.7頭／箇所）と平年よりも少なかった。
- ・7月中下旬のスギ、ヒノキにおけるカメムシ類の平均寄生数は10結果枝あたり0.8頭（平年1.4頭）と平年より少なかった。ヒノキの毬果の吸汁痕数は平均0.9本（平年1.0本）と平年並であった。
- ・7月中旬調査の吸汁痕数からみると、75日後に成虫が離脱すると推定されるため、10月上旬頃から果樹園へ飛来が多くなる可能性がある。

防除対策

- ・フェロモントラップ及び予察灯による誘殺数は、防除所ホームページを参照する。
- ・スギ・ヒノキ林付近の果樹園では飛来しやすいため、ほ場の発生状況をよく観察し、発生が見られれば防除を行う。

【キク】

<生育の概況等>

生育は平年並である。

●白さび病

予報の根拠

- ・ 7月上旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発病株率 0.7%）。
- ・ 1ヶ月予報では、8月の降水量は平年並～多いため、本病の発生を助長する。ただし、夏期の高温下では、ほとんど発生しない（本病の発病適温 17℃前後）。

防除対策

- ・ 8月の高温は本病原菌の生育に適さないが、この時期に初期防除を怠ると、発病に好適な条件となる秋以降の防除が困難となるので、発生ほ場では初期防除に努める。
- ・ 発生ほ場、特に罹病性品種を中心に薬剤散布を行う。ただし、薬剤によっては薬害が出やすいので、新しい品種では小規模の試し散布を行う。
- ・ 発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、土中に埋めるかビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。

●黒斑病、褐斑病

予報の根拠

- ・ 7月上旬の巡回調査では、平均発病株率 1.4%（平年 3.1%）と平年より少なかった。
- ・ 1ヶ月予報では、8月の気温は平年並～低く、降水量は平年並～多いため、本病の発生を助長する（生育適温：黒斑病 24～28℃、褐斑病 20～28℃）。

防除対策

- ・ 本病は潜伏期間が長く発病後の防除では手遅れとなるので、薬剤の予防散布を行う。
- ・ 多雨や高湿で発生が助長されるため、長雨が続く場合には発生に注意する。
- ・ 発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、土中に埋めるかビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。
- ・ 土の上に落ちた被害葉が伝染源となるため、被害葉をほ場に放置しない。

●えそ病（トマト黄化えそウイルス：T SWV）

予報の根拠

- ・ 7月上旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発病株率 0.1%）。媒介虫であるアザミウマ類の被害株率は 12.0%（平年 12.4%）と平年並であった。
- ・ 1ヶ月予報では、8月の気温は平年並～低く、降水量は平年並～多いため、アザミウマ類の増殖を特に助長しない。

防除対策

- ・ 発病株は伝染源となるため速やかに抜き取り、土中に埋めるかビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。
- ・ ミカンキイロアザミウマやネギアザミウマなどのアザミウマ類は本ウイルスを媒介するため、食害が認

められる場合には速やかに薬剤散布を実施する。

●アザミウマ類（クロゲハナアザミウマ、ミカンキイロアザミウマ）

予報の根拠

- ・ 7月上旬の巡回調査では、平均被害株率は12.0%（平年12.4%）と平年並であった。
- ・ 1ヶ月予報では、8月の気温は平年並～低く、降水量は平年並～多いため、アザミウマ類の増殖を特に助長しない。

防除対策

- ・ えそ病が認められた場合は被害株を速やかに抜取り処分するとともに、アザミウマ類の薬剤防除を徹底する。
- ・ 開花期のキクは特にミカンキイロアザミウマの被害を受けやすいため、蕾の膜割れ時から発生に注意する。

●オオタバコガ

予報の根拠

- ・ 7月上旬の巡回調査では、平均被害株率は4.9%（平年3.0%）と平年より多かった。
- ・ 浜松市のキク産地におけるフェロモントラップの誘殺数は平年並～多く推移している。
- ・ 1ヶ月予報では、8月の気温は平年並～低く、降水量は平年並～多いため、本種の増殖を特に助長しない。

防除対策

- ・ 例年8～9月は発生が増加するため、芽における被害の発生に注意し、初期防除に努める。

【イチゴ】

<その他の病害虫>

●炭疽病

- ・ 本病は比較的高温を好み、胞子が頭上灌水や雨滴の跳ね上がりにより飛散することから、高温・多湿条件下で多発する。一度発病してしまうと防除が困難なため、育苗床では定期的な予防散布に努める。
- ・ 発病株は見つけ次第抜き取り、ほ場外に持ち出し処分する。移植時には感染苗を本ほへ持ちこまないように十分注意する。

●うどんこ病

- ・ 育苗中の防除を徹底する。また、現在、発病が見られないほ場も予防的に薬剤散布を行い、本ほへ持ちこまないようにする。

●コガネムシ類

- ・ 発生がみられるほ場では、育苗期、定植時に薬剤散布を行う。定植時には根への幼虫の寄生に注意し、本ほへ幼虫を持ち込まないように注意する。

●ハダニ類

- ・ 1ヶ月予報によると、気温は平年並～低いため、発生が多くなる苗場がある。
- ・ 発生がみられるほ場では、育苗期、定植時に薬剤散布を行う。定植時に葉の寄生に注意し、本ほへ持ち

込まないように注意する。

【野菜全般】

●ハスモンヨトウ

予報の根拠

- ・フェロモントラップの調査によると、静岡市および御前崎市における誘殺数は平年並だが、磐田市は、平年より高く推移していた。
- ・1ヶ月予報では、気温は平年並～低く、降水量は平年並～多いため、本虫の発生を特に助長しない。

防除対策

- ・初期発生に注意し、若齢のうちに防除を行う。施設栽培では、施設の開口部に防虫網を設置し侵入を防ぐ。なお、成虫の誘殺数データは防除所ホームページで提供している。

3 季節予報

(1) 1か月予報（東海地方 平成年7月21日 名古屋地方気象台発表）

【予報期間】 7月23日から8月22日

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。向こう1か月の平均気温は、平年並または低い確率ともに40%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。日照時間は、少ない確率50%です。週別の気温は、1週目は、低い確率50%です。2週目は、平年並の確率50%です。

【確 率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多%
1か月	気温	40	40	20
1か月	降水量	20	40	40
1か月	日照時間	50	30	20
1週目	気温	50	40	10
2週目	気温	30	50	20
3～4週目	気温	30	30	40

【予報の対象期間】

- 1か月 : 7月23日(土)～8月22日(月)
- 1週目 : 7月23日(土)～7月29日(金)
- 2週目 : 8月30日(土)～8月5日(金)
- 3～4週目 : 8月6日(土)～8月19日(金)

(2) 3か月予報（東海地方 平成28年7月25日 名古屋地方気象台発表）

【予報期間】 8月から10月

【予想される向こう3か月の天候】

向こう3か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。この期間の平均気温は、高い確率50%です。

8月 平年と同様に晴れの日が多いでしょう。気温は、平年並または高い確率ともに40%です。

9月 天気は数日の周期で変わるでしょう。気温は、高い確率50%です。

10月 天気は数日の周期で変わるでしょう。気温は、平年並または高い確率ともに40%です。

【気温】

3か月			8月			9月			10月		
低	並	高	低	並	高	低	並	高	低	並	高
10	40	50	20	40	40	20	30	50	20	40	40

【降水量】

3か月			8月			9月			10月		
少	並	多	少	並	多	少	並	多	少	並	多
40	30	30	30	40	30	40	30	30	30	40	30

※ 参考資料

	平均気温 (°C)			降水量 (mm)		
	8月	9月	10月	8月	9月	10月
浜松	27.0	24.1	18.8	151	249	165
静岡	27.0	24.1	18.9	251	292	200
三島	26.8	23.6	18.0	209	243	184

*降水量は小数点以下を四捨五入しています。

※参考資料

1. 利用上の注意

- ・気温・降水量は「低い(少ない)」「平年並」「高い(多い)」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1981~2010年の30年間における各階級の出現率が等分(それぞれ33%)となるように決めてあります。(気候的出現率と呼びます)。
- ・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い(少ない)場合は「平年に比べて多い(少ない)」、また平年の日数と同程度に多い(少ない)場合には「平年と同様に多い(少ない)」と表現します。なお、単に多い(少ない)と表現した場合には対象期間の2分の1よりも多い(少ない)ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病害虫防除所 〒438-0803 磐田市富丘678-1 TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780 URL http://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html
--

平成 28 年度 技術情報第 4 号
イネ いもち病（葉いもち）

平成 28 年 7 月 27 日
静岡県病害虫防除所長

県内でイネいもち病（葉いもち）が平年よりも多く発生しています。
被害の拡大が予想されるため、多発ほ場では、防除の徹底をお願いします。

1 発生状況

7 月上中旬に行ったイネの巡回調査の結果、いもち病（葉いもち）の発病株率は 6.5%（平年 2.0%）、発生面積率は 30%（平年 23%）と平年よりも発生が多かった（表 1）。発生ほ場では、病原菌胞子の形成量が少ない停止型病斑（図 1 左：周辺部が褐色で、内部が灰色あるいは白色の病斑）が多かった。

1 ヶ月予報によると、8 月の気温は平年並～低く、降水量は平年並～多く、日照時間は平年よりも少ないため、葉いもちの発生に好適な気象条件になると予想される（感染好適条件：気温 15℃～25℃、葉面湿潤時間 10 時間以上、前 5 日間の平均気温が 20℃～25℃を全て満たす時）。

2 防除方法

- （1）置き苗には、いもち病が発生しやすく伝染原になりやすい。未だに放置してあるほ場も見られたため、不要なものについては早急に撤去する。
- （2）急性型病斑（図 1 右：病斑周辺部に褐色部分が少なく、内部が暗緑色あるいはねずみ色の病斑）が多い場合には速やかに薬剤散布をする。
- （3）上位葉に発生した葉いもちは、穂いもちの発生を助長する。そのため、葉いもちが多発しているほ場では、穂いもちの防除を適期（穂ばらみ期～穂ぞろい期）に行う。
- （4）本県では MBI-D 剤（「ウィン」、「デラウス」または「アチーブ」を含む剤）耐性いもち病菌が発生している。また、他県では QoI 剤（「アミスター」または「嵐」を含む剤）耐性いもち病菌が発生し問題となっており、本県でも発生が懸念される。耐性菌の発生リスクが高い薬剤を使用する場合は、連用を避けるなど適切に使用する。耐性菌に関する詳細は県病害虫防除基準の「殺菌剤耐性菌に関する各種資料について」の項を参照（URL：<http://www.s-boujo.jp/kihon/file/14sonota/1404.pdf>）。



図 1 被害の様子（左：停止型病斑、右：急性型病斑）

表1 イネいもち病の発生状況

調査地域	調査時期	発病株率 (%)	発生面積率 (%)
田方平坦地	7月7日	0.8 (0.2)	1.0 (6)
東部高冷地	7月8日	0.0 (0.7)	0 (2.1)
志太榛原	7月11日	5.2 (0.7)	4.0 (1.5)
中遠・西部(普通期)	7月6日・12日	8.8 (4.9)	4.0 (3.4)
中遠(早期)	7月6日・12日	17.6 (3.7)	6.0 (3.7)
県平均		6.5 (2.0)	3.0 (2.3)

() 内は過去10年間の平年値を示す

表2 イネのいもち病に対する主な防除薬剤¹⁾

系統名	FRAC ²⁾ コード	商品名	使用方法	希釈倍数 使用量	使用時期	本田の 使用回数
アミド系殺菌剤	P3	ルーチン粒剤	湛水 散布	1kg/10a	収穫30日前まで	2回 以内
ストロビルリン 系殺菌剤	11	オリブライト 1キロ粒剤	散布	1kg/10a	出穂10日前まで (但し、収穫45日前まで)	1回
メラニン生合成 阻害剤	16.1	ビームゾル	散布	1000倍	収穫7日前まで	3回 以内
		コラトッパ 1キロ粒剤 1 2	散布	1~1.5kg /10a	葉いもちに対しては 初発10日前~初発時、 穂いもちに対しては 出穂30日前~5日前まで	2回 以内
メラニン生合成 阻害剤・抗生物質 殺菌剤	16.1 ・24	ダブルカット フロアブル	散布	1000倍	穂揃期まで	2回 以内
メラニン生合成 阻害剤・その他	16.1 ・U14	ブラシン フロアブル	散布	1000倍	収穫7日前まで	2回 以内
		ブラシン 粉剤DL	散布	3~4kg /10a	収穫7日前まで	2回 以内
抗生物質 殺菌剤	24	カスミン液剤	散布	1000倍	穂揃期まで	2回 以内
その他	6	フジワン粒剤	湛水 散布	3~5kg /10a	葉いもちに対しては 初発7~10日前、 穂いもちに対しては 出穂10~30日前(但し、 収穫30日前まで)	2回 以内
		P2 オリゼメート 粒剤	散布	3~4kg /10a	葉いもちには 初発の10日前~初発時、 穂いもちには 出穂3~4週間前(但し、 収穫14日前まで)	2回 以内

1) 静岡県農薬安全使用指針・農作物病害虫防除基準 (<http://www.s-boujo.jp/>) に掲載されている薬剤から抜粋(平成28年7月25日時点JPP-NET配信データによる)

2) 薬剤を作用機構ごとに分類した番号。薬剤耐性菌の発生を未然に防ぐためには、作用機構の異なる剤をローテーションで使用する必要がある。

【問合せ先】静岡県病害虫防除所

〒438-0803 磐田市富丘678-1 TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780

URL <http://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html>